

第32回看護の日事業

看護職員等からの体験談

当協会は、平成 20 年度(第 18 回)から「看護の日」にちなんで、「新人看護師からの体験談」を募集し、優秀作品を表彰してきました。平成 26 年度(第 24 回)からは、看護師養成機関からも募集するようになり、今年度は 92 件の応募がありました。どの作品にも、患者さんとの関わりを通して学び、看護への思いを深め、さらに気持ちを新たに看護に取り組んでいこうとする思いがあふれていました。応募して頂いた方々をはじめ、各施設の皆様に心より感謝申し上げます。

その中から、受賞者 6名の作品をここに紹介します。

受賞者

最優秀賞 1名

應矢 紀子 (富山大学附属病院)

優秀賞 2 名

今井 みのり (厚生連高岡病院)

市山 加奈恵 (市立砺波総合病院)

特別賞 3名

谷崎 千秋 (公立南砺中央病院)

西田 紗記 (富山市立看護専門学校)

森川 愛水 (富山県立大学看護学部看護学科)

参加賞 86 名

公益社団法人 富山県看護協会





一滴のお酒

富山大学附属病院 應矢 紀子

患者の妻に「このまま2週間、死ぬのを待つだけですか」と言われた。

私は摂食・嚥下障害看護認定看護師で、担当看護師から終末期患者の誤嚥性肺炎の 予防について相談を受けたため、訪問したのだった。妻といろんな話をしているうちに、患 者はウイスキーが大好きだということが分かった。

医師と看護師長には、最期まで誤嚥性肺炎を起こさないで過ごしながらも、「大好きな お酒を一滴でも味わってもらいたい」と安全に留意した方法を説明し、承諾を得た。

妻や担当看護師と一緒に口腔ケアを行い、顔や口のマッサージをしたが、患者の表情は 変わらなかった。

ウイスキーを口腔内マッサージ用の綿棒に浸して凍らせ、冷たいお酒の刺激で何か反応があればと考えたものの、ウイスキーを凍らすには−40℃の低温が必要で、簡単にはできないことが分かった。そのため、口腔内マッサージ用の綿棒に水を付けて凍らせてから、冷えたウイスキーを一滴ほど付けた。

口腔ケアと顔のマッサージをした後に、その綿棒で舌を刺激した。

すると、何秒たったか分からないが、急にパチっと目が開いて、一瞬ニコっと笑ったように 見えた。声はなかったけれど。

その瞬間、妻は「わーっ」と声を上げて喜び、涙した。その姿を見て私も涙が流れた。 それから毎日、妻は担当看護師や私とお酒を使った口のアイスマッサージをしたが、そう何 度も同じように反応があるわけでもなく、日に日に患者の反応はなくなった。

そして、患者は旅立ったが、誤嚥性肺炎を起こすことはなかった。これまで、終末期の看護をしてきたが、もっとこうすればよかったのではないかと思うことばかりである。コロナ禍の今、病院で患者と家族が過ごす時間は限られている。患者の思いを聴き、寄り添った看護がしたいと思う。





「ああ気持ちいい」

厚生連高岡病院 今井 みのり

「毛布はこっちの面が上。左足にはかけないで。足先は出してほしいわ」「コップに水を注いで。ペットボトルはそのまま机に置いておいて。ふたは緩めてちょうだい」。病室を訪れるたびに細かいオーダーをする白血病の女性。看護師になって間もない頃、日々の業務を覚えることに必死な私は、女性に言われるままに動くことが精いっぱいだった。

その女性のもとを訪れて数度目、恥ずかしながら私はやっと、彼女の枕元に散る毛髪が多いことに気づいた。注文の多い彼女がそれを気にしていないはずがないのではと、なんとなく気になった。「髪の毛ね、取っても取ってもすぐ抜けるから、お願いするのはもうやめたのよ」と難しい顔をした彼女は、清掃後、できる限りきれいにしたシーツの上で、「ああ気持ちいい」と笑った。

それからその女性の部屋担当になるたび、枕元をきれいにした。当時の私は、点滴交換も採血もまだ自立していない、今以上に未熟な看護師だった。できることと言えばそれくらいだったのだ。そんな私に、女性は他愛のない会話をしてくれた。ある日、「あなたが今日の担当だとあいさつに来たときが、うれしい瞬間なの。一日、心強いのよ。本当なんだから。また来てちょうだい」とこっそり教えてくれた。胸の奥が熱くなると同時に、申し訳ない気持ちだった。その間にも、女性の容態は徐々に重くなっていく。倦怠感が強い日が多くなり、細かなオーダーも少なくなった。それでも、女性は私の顔を見つけると「また頭、お願いね」とつぶやいた。

しばらくして、女性の担当になることはまれになった。ある時、女性の部屋からナースコールが鳴った。担当看護師に代わって病室に入ると、もうしゃべれない状態だった彼女が、何かを訴えようとしている。言わんとしていることを必死に探ったが、結局、真意をくみ取ることはできなかった。自分の無力さが悔しくて悔しくて、「分かってあげられなくてごめんなさい」と手を握ると、女性は小さく首を横に振って、「あ、た、ま」と口を動かしたように見えた。はっとして、以前と同じように枕元をきれいにする。脱毛はもうほとんど目立たない枕元だったが、清掃後、静かにうなづき私を見つめ、彼女はかすかにほほ笑んだ。

入職して9カ月。少しずつだができることが増えてきた。だが、何もできなかった頃の私を 最期まで信頼してくれた人がいたことは、私の支えだ。他の患者さんから「ああ気持ちいい」 の声を聞くたび、その大切さを教えてくれたあの女性の笑顔が思い出される。







会話することの大切さ

市立砺波総合病院 市山 加奈恵

Aさんは腸閉塞で入院している 60 代の女性だった。Aさんは検査や処置を拒否し、絶飲食の状態のまま、治療は進んでいなかった。点滴の針を交換する時には、子供っぽい口調で「嫌だっ」と言われるため、なんとなく医療者側にとっては「困った患者」「変わった患者」という印象になっていた。私はなぜ治療を拒否するのだろうと思いながら、話をする機会を持てずにいた。

数日後、私はAさんの担当になった。いきなり治療を拒否する理由を尋ねても心を開いてはもらえないだろうと思い、まずAさんがどのような人なのか知るために「入院する前はどんな生活をしていたの」と声をかけた。するとAさんは「だれもそんな話をしてくれなかった。みんな私のこと、どうでもいいがやろ」と突然、泣き出した。泣きながらも、食事は自分で作っていたこと、猫が好きなことなどを話してくれた。そして、「早く家に帰りたいけど、痛い治療は怖くて受けられない」と治療に対する思いを語った。

会話の後、私のAさんの印象は「とっても怖がりで、応援が必要な人」に変化し、看護の力で治療が受けられるようにできるかもしれないと思った。私はAさんに許可を得てから、Aさんの気持ちを他の看護師と主治医、夫に伝えた。すると、看護師はAさんと積極的に会話するようになり、主治医は処置時の痛みが最小限になるよう検討し、夫はAさんが寂しくないようにと、猫の写真をベッドサイドに飾った。Aさんは医療者に思いを表すようになり、最終的に痛みを伴う治療も受け、元気に退院した。

この出来事から、その人の生活や価値観を知ろうとする会話は、「あなたのことを気にかけています」というメッセージとして相手に伝わり、人は会話を通してお互いの気持ちや思いを理解していると実感した。今後、患者さんの生活背景や価値観は多様化するだろうが、色眼鏡をかけずに患者さんと向き合い会話することを大切にし、希望に添った看護を行っていきたい。







最初で最後

公立南砺中央病院 谷崎 千秋

数年間、救命救急センターに勤務した中で数え切れない患者さんに出会い、多くの方の 最期に立ち会った。そのほとんどは、突然の出来事である。それだけに残された家族の動 揺や不安はなおのこと大きい。

ある朝、80歳代の男性が心肺停止の状態で搬送されてきた。しかし、救命はかなわず、お亡くなりになった。朝、起きて来るのが遅いと思った妻が寝室に様子を見に行き、意識も呼吸もない状態で発見し、救急要請したものだった。妻は当初「自分がもっと早くに見に行っていれば。後悔しかないです」と話していた。医師から大動脈瘤破裂が原因であり、病院で起こったとしても、おそらく助からなかったと説明されると、「もともと大動脈瘤を指摘されていて、」年もつかどうかと言われていた」と話し、破裂した場合は延命処置を望まないと意思表示していたことも分かった。

全ての検査が終わった後、家族だけの時間を過ごすことは希望しなかったが、それでも、エンゼルケアにお誘いしたところ「やってみようか」と参加された。清拭やエンゼルメイクをしながら、「昨日まで本当に普通だった。料理が好きな人で、昨日も唐揚げを作ってくれていたんです。揚げ物が好きだったから」と話してくれた。他に家族にしてもらえることは何かと考え、最後に妻に整髪をお願いすると、「最初で最後です。今までやってあげたことがなかった」と言いながら、穏やかな表情で髪にブラシをかけていた。

限られた時間の中で、初対面の家族に対しどのように関わればいいのか、何度、看取りに携わっても難しいと感じていた。しかし、何が遺族の悲しみに寄り添うケアにつながるのかと難しく考えるより、ほんの小さなきっかけが家族にとって思い出になることもあるのだと感じられた。もちろん専門的な知識や技術を得ることは重要である。けれど、日常の小さなことも大切にし、視線を向けられる看護師でありたいと思った。







患者さんの笑顔のために私ができること

富山市立看護専門学校 西田 紗記

私が病棟で受け持ったAさんは、認知症と幾度もの脳梗塞を重ねてきた後期高齢者の男性であった。受け持ち初日は、発語がはっきりせず意思疎通が難しいと感じた。また突然の興奮状態によって体動が激しくなるため、体幹と両上肢は抑制され、点滴をしていない左手にもミトンによる抑制がされていた。Aさん自身の安全のために、抑制はやむを得ないことであった。

2日目からは、Aさんのペースに合わせてゆっくり落ち着いて話すことで、何を訴えたいのかが少しずつ分かるようになってきた。その日は、Aさんの傍にいることを絶対条件として抑制を解除してもらった。私は、少しでも長く解除の時間が持てるよう、Aさんの病室で過ごした。手足の運動を一緒に行いながら、肯定的な声かけを心掛け、簡単な質問でたくさん話しかけるようにした。するとAさんに危険な行動が見られないばかりか、「楽しいね」と笑顔で話してくれた。私は、Aさんの心が安定していると感じ、とてもうれしかった。

3日目以降、抑制解除の時間も兼ねて車椅子で散歩をすることが多くなった。病棟内で出会う人に握手をしたりハイタッチをしたりと楽しそうなAさんにつられて、皆も笑顔になっていくことが、うれしかった。急な興奮状態になった時には、すぐにユマニチュードの動画を思い出した。Aさんのベッドサイドにしゃがみ込んで目線を合わせ、抑制された手を両手で包みながら「私はここにいます。傍にいますよ」と声をかけた。Aさんは「寂しかった」と話し、その後、少しずつ落ち着きを取り戻した。学生である私でも、少なからずAさんの支えになっているのではないかと感じた。また、Aさんにとって、抑制解除が唯一、笑顔になれる時間であると確信できた。

今回の実習で患者さんの反応を通して自分の行ったことが良かったのか、良くなかったのかを知ることができると改めて実感した。それをAさんの笑顔が証明してくれた実りある実習であった。





何事にもトライ!

富山県立大学 看護学部看護学科 森川 愛水

大学3年生となり実習が進む中、私は急性・回復期の実習でAさんと出会いました。Aさんは、術後のリハビリ目的で入院された方でした。私が、初めてAさんにあいさつに行った時、明るく迎えて下さったのが印象に残っています。

Aさんは、いつも私を笑顔で迎えて下さり、リハビリに対しても意欲的な方でした。私は、A さんのリハビリ意欲が上がるよう、歩数計を使い毎日の歩数を一緒に記録したり、家に帰った時の目標を立て、病院内でシミュレーションを行ったりと積極的に取り組みました。その一方で、疼痛や痺れが強く、リハビリを休むこともあり、その時、私は足をさするなどAさんが安楽に過ごせるよう援助しました。Aさんの疼痛や痺れに関してカルテを見ると、土日など私の実習のない日に訴えが多く、私が活動量を増やし過ぎたせいで疲れてしまったのでは、自分の行っている看護がAさんにとって負担となっているのではないかと不安になりました。Aさんは、「あなたがいないと、気分が沈んで痛くなるのよ」とおっしゃって下さいましたが、私はそのことが気になったまま3週間の実習を終えました。

年内の実習が終わり、年が明けると大学宛てで私のもとにAさんからの年賀状が届きました。Aさんは絵手紙を趣味にしており、年賀状には力強く虎が描かれ、「何事にもトライの I 年に」とAさんらしい一言が添えられていました。裏面には、入院中の私との思い出や感謝の言葉がびっしりと書かれており、自分の行った看護がAさんの喜びや前向きな気持ちにつながっていたことが分かり、とてもうれしく思いました。

このことから、学生であっても、患者さんと真剣に向き合うことで、治療やケアに前向きになれるような働きかけができるということを実感できました。これからも精いっぱい患者さんと向き合い、心のこもった看護をしていきたいと思います。Aさんからいただいた言葉を励みに、何事にも前向きに挑戦していきたいです。



「看護の日」制定の趣旨

看護の心は、大人も子供も、病気や障がいのある人もない人も、年齢・性別を問わずお互いを思いやる心です。この看護の心、ケアの心、助け合いの心につい理解を深め育んでいけるように、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ、1990年に5月12日が「看護の日」として制定されました。

令和 4 年度看護職員等からの体験談 発行 公益社団法人富山県看護協会・富山県ナースセンター 〒930-0885 富山市鵯島字川原 1907-1 TEL 076-433-5251 FAX 076-433-5281 URL http://www.toyama-kango.or.jp